

2023年4月2日

人間の弱さを貫く神の慈しみ

マタイ 26 : 69~75

・受難週を覚えて

今日から、新しい2023年度の礼拝の歩みを始めます。そして、今日から受難週に入ります。2023年度の礼拝の歩みを、イエス様のご受難を覚えることから始めることが出来る。そのことに、神様の御導きを思います。今年度も、イエス様のお姿、それも十字架の道を進まれたイエス様のお姿を心に深く受け止めることを覚えて、今年度も礼拝の生活を歩んでいきたいと思えます。

先週の高知中央教会の聖書研究祈祷会で、ゲツセマネでのイエス様の祈りの箇所を共に学びました。イエス様が苦しみの中で祈られる。しかし、弟子たちは眠り込んでしまっていたのです。弟子たちが何度も繰り返し眠り込んでしまったのですが、そういう姿がなぜ聖書に残されているのかを確認したのです。それは、弟子たちが自ら眠り込んでしまっていた姿を、何度も語ったからなのです。それで、聖書にその時のイエス様の姿、そして、眠り込んでしまった弟子たちの姿が残されていくことになりました。そして、今日の箇所でも同じことを感じたのです。どうして聖書を通して、このペトロの姿を私たちが受け取ることができるのでしょうか。それも、まるでその場に居るかのように、生々しい姿でペトロの姿を知ることができるのかということです。この時、この場に他の弟子たちはいません。ペトロー一人です。ですから、ペトロがその時が自分の姿を語ったからなのです。それも、包み隠さず、その時起こったことをそのまま語っていたからなのです。そして、聖書に残されていくことになったのです。

そうすると、ペトロにとってこの時の出来事が何であったのか、分かってくるような思いがするのです。確かに、恥ずべき自分の姿が表れているということは、確かであると思えます。しかし、それだけならば、人間ですから包み隠さずとはならないと思うのです。包み隠さずとなっているのは、やはり、この時の自分の姿は、単に失敗であったということではないからなのです。自分の弱さが表れているこの場所が、実は思いもしない恵みが示された場でもあったということなのです。そして、そのことを伝えるために、ペトロは三度イエス様を知らないと言ってしまった自分の姿を、驚きと感謝と持って語ったのです。それ故に、私たちもあの大祭司カイアファの中庭にいるように、この時のペトロの姿を受け取ることができるのです。

今日は、示されている聖書の箇所に聞くことを通して、人間の姿を、そして、人間の弱さの中に貫かれている神様の慈しみを、受け取っていきたいと思えます。そうし

て、今年のイースターを迎える備えをさせていただきたいと思います。

・一度目のペトロの否認

裁判にかけられるために、イエス様がゲツセマネで人々に捕らえられた時、イエス様の弟子たちはどうしたのでしょうか。56 節にこういう言葉があります。「このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。」、イエス様の弟子たちは、一人残らず逃げ去ってしまったということなのです。しかし、弟子の一人であったペトロは、一旦は逃げ去ったのですが、やはり、イエス様がその後どうなるのか、成り行きを見届けなければと思い直したのです。こう思ったのは、イエス様から裏切ることになると予告された時、「たとえ死ぬことになっても、どこまでもついていきます」とイエス様に言い切ったことが、やはり心にあったと思います。それで、イエス様が捕らえられて連行された大祭司カイアファの屋敷にもぐりこんだのです。祭りで大勢の人が集まっていたから、その中に紛れ込んで、誰にも気が付かれることなく、何とか裁判の成り行きを知ることが出来るのではないかと思ったに違いないのです。

ところが、そこで思いもしない事態に立ち至ることになったのです。中庭で座っていた時、一人の女中が近づいてきて、こう言いました。「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と。誰にも気づかれずに、イエス様の裁判の成り行きを見ようと思っていたペトロは、突然イエス様と一緒にいたことを知っている人と出くわすことになったのです。「あなたもあのイエスの仲間ではないか」と。イエス様の仲間と分かれば、大変なことになります。捕らえられるかもしれない。それで、咄嗟にペトロはその言葉を打ち消したのです。「何のことを言っているのか、わたしには分からない。」と。

私は、この言葉に、ペトロの思いがよく表れていると思いました。やはり「イエス様を知らない」と言うことはできなかったのです。一方で、「仲間ではないか」との言葉が投げかけられている。それで、ペトロは一旦「あなたの言っていることが分からない」と言葉を濁して、その場を立ち去ろうとしました。イエス様の仲間であることを自分の言葉で否定するわけではない。しかし、聞いた人は、その女中の勘違いかと思う。そういう答え方をしたのです。そして、その場所を立ち去って行ったのです。それで、何とか危機は脱することができたはずだったのです。

・二度目、三度目の否認

しかし、事はそれで済まなかったのです。彼は、中庭から、門の方に移動しました。自分がイエス様の弟子であることに気が付いた女中から離れるためだったのです。ところが、その門の所で、別の女中がペトロに目を留めて言いました。「この人はナザレ

のイエスと一緒にいました。」と。今回は、ペトロに向かって言っているのではありませんでした。そこにいた人々に向かって行っているのです。そうして、みんなの視線が、ペトロに集まっているのです。この者はイエスの一味ではないか。ユダヤの国を混乱に陥れて、神様の権威を蔑ろにした者の仲間ではないか、そういう視線が、一斉にペトロに注がれたのです。

そして、今度ペトロは明確に言う以外なくなってしまったのです。「そんな人は知らない」と、明言することになりました。ペトロ自ら、自分の口で「イエス様を知らない」と言ったのです。それも、「誓って」とあります。神様に誓う、通常はうそを言わないという前提です。しかし、それを言わなければならないほど、危機的な状況に彼は追い込まれてしまったのです。そして、思わず誓って「知らない」と言ってしまうことになったのです。

しかし、そうして否定をして終わらなかったのです。しばらくして、そこにいた人々がこういうことを言い始めたのです。「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる。」と。これまでは、一緒にいたのを見たと思うという印象に過ぎませんでした。ところが、今度は、ある意味で証拠を持って、迫って来たのです。それは、言葉遣いだったのです。当時、イエス様が育て、弟子たちも育ったガリラヤ地方の出身の人とエルサレムの人では、簡単に見分けがついたそうです。それは、言葉遣いが違っていただけです。私たちの間でも、方言まで行かなくても、言葉のイントネーションや言葉の使い方、出身地がある程度分かるということがあると思います。それと似ていて、同じような言葉を使っているようで、やはり言葉の使い方が違っていただけです。それで、そこに居合わせた人たちは、ペトロの言葉を聞いていて、「あなたはガリラヤの人ではないか、だから、あのイエスの仲間だ」と問い詰められることになったのです。

ここまで至って、ペトロはどうしたのでしょうか。とうとうペトロは、呪いの言葉さえ口にしながら「そんな人は知らない」と誓い始めたのです。「呪いの言葉」とは、「もし自分が偽りを言っているならば神に呪われてもよい」、そういう意味の言葉です。ですから、その意味で言えば「絶対に知らない」と非常に強く否定したということなのです。それが、三度目の問いに対するペトロの答だったのです。言ってみれば、そこまで至ってしまったのです。

・ペトロの姿に示されるもの

ペトロは、そんなに以前ではありません。僅か数時間前です。イエス様にこう言いました。「たとえと一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどと

決して申しません。」と言ったのです。イエス様のことを知らないなど言うことは決してないと、イエス様に向かって明言しました。この言葉に、決してうそや偽りはなかったと思います。彼は、イエス様にどこまでも従っていきたいと思っていたと思いますし、従って行けると思っていました。しかし、それから僅か数時間です。数時間経って、ペトロはイエス様の言葉の通り、イエス様のことを三度知らない言うことになったのです。それも、最後は「絶対に知らない、神様に誓って絶対に知らない」とまで言い切ることになったのです。それが、ここに示されているペトロの姿です。

イエス様に「どこまでも従います」と言った時、ペトロが本当には分かっていないことがありました。それは、自分の弱さです。自分がいかに弱くもろいかということです。自分の身に大きな危険が差し迫る時に、人はその状況を単に自分の熱意や確信だけでは乗り越えていくことはできないということなのです。まさに、ペトロにとって、その極限の場所が、この大祭司カイアファの中庭でした。そして、その場所での人々からの問いかけが、彼の思いを木っ端微塵に打ち砕くことになったのです。彼は、そこで結果として、イエス様を知らないと強く言うてしまうことになったのです。

このペトロの姿を思う時に、誰もが、自分に姿を見るような思いがするのではないかと思います。もし、自分がこの場所にいたらどうしただろうかと、誰もが考えると思います。そして、いや自分はペトロと違って、この場所でもちゃんと「イエス様の仲間です」と言うことができたらどうだろうと思うのです。自分なら、最後までイエス様に従って歩んだと胸を張って言える人は、恐らく一人もおられないのではないかと思います。誰もが、このペトロの姿に、自分の姿を重ねてしまうのではないかと思います。そして、人がいかに弱い存在であるか、心底受け止めさせられるような思いで、このペトロの姿を見、そして、自分の姿を思うのではないかと思います。

・ペトロが受け止めたこと

この箇所は、本当に弱い人間の姿が、生々しく示されています。それは、私たちに姿でもあると思います。そうすると、人間は所詮弱いということが、ここで示されているということなのではないでしょうか。ペトロでさえそうであったのなら、弱い私などもっと簡単にイエス様に背を向けてしまう、そういうことが、この箇所に示されているのでしょうか。やはりそうではないと思われたのです。ペトロは、この時の自分の姿を語りました。自分の弱さを率直に語りました。しかしそれは、私も弱かったので、あなたも同じですよということを言いたいからではないのです。その自分に、全く考えもしなかった道が用意されていたということなのです。

ここでのペトロの姿は、こんな姿だと思います。最初、「何を言っているか分からな

い」と言葉を濁したところから始まって、次には「知らない」と明言する、更に三度目は「絶対に知らない」と神様に誓うというところまで至っているのです。もう、坂道を転げ落ちていっているという印象です。もうどこまで落ちてしまうか分からない、それがこの時のペトロの姿だと思います。危機的な状況の中で、坂道を転がり落ちていくような状態に、ペトロはいたのです。

そして、どこまで転がって行ってしまうか分からない、そういうペトロが、突然立ち止まることになったのです。それは、その時、鶏が鳴いたからなのです。鶏が鳴く、そのことを通して、イエス様のある言葉を思い出したのです。「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と、言われた言葉だったのです。イエス様は敢えて「鶏が鳴く前」と言われました。勿論これは、夜が明ける前という意味もあると思いますが、「鶏が鳴く前」と言われたことが、ペトロを踏み止まらせる大切な意味を持つ言葉となりました。

イエス様は、当然、弟子たちの抱える弱さを知っておられたのです。知っておられた。そして、今は威勢の良いことを言っているが、結局裏切ってしまうのだと、弟子たちを覚めた目で見られるのではないのです。そうして大切なものを見失うような状況に追い込まれることを知っておられて、だからこそ、その時に彼らを本当に意味で導く言葉を、先に語ってくださっておられたのです。そして、その言葉によって大切なことに思い出し、神様の許へと戻ってくるができるように、既に道を備えてくださっていたのです。

「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」、この言葉は、最後の晩餐の後、オリーブ山に向かって行く時に語られました。先ほども、言いましたが、この言葉を語られた時、弟子たちは大変心外な思いだったのです。自分はどこまでも従っていきたいと思っている、その思いをイエス様はどうして理解してくださらないのか、そういう苛立ちを弟子たちは覚えたのです。ですから、ペトロも、恐らくイエス様が語られた言葉の重さには、全く気が付いていなかったと思います。「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」、この言葉を、自分たちを批判するための言葉と、思っていたと思います。しかし、この言葉は、ペトロにとって、どこまで落ちていくか分からなくなった時に、そこからもう一度神様の許へと立ち返る道を開く大切な言葉となったのです。

ペトロは、鶏が鳴く声を聞きました。そして、イエス様の言葉を思い出し、自分がここまで何をしてきたのか、本当に分かったのです。イエス様が言われた「三度わたしを知らないと言う」、その通りだったということです。彼は、激しく泣いたのです。激しく泣く、強い後悔だと思います。これは、単なる反省ということを超えて、もう

自分ではどうすることもできない、自分の弱さを心底知らされたことだと思います。

そして、この後、ペトロは復活されたイエス様に再び出会い、もう一度弟子として歩み出していくことになりました。自分の弱さを見て見ぬふりをするのではなく、そこに立って歩む、つまり、自分が自分の確信や力でイエス様に従うのではなく、イエス様に導かれるしかない、先を歩んでくださるイエス様の後ろをついて行くしかない、その真実を受け止めさせられるのです。そして、再び弟子として歩むことになったのですが、十字架の前と後では、全く違ったものに支えられて歩むことになったのです。

・イエス様の慈しみ

この時、どこに向かって行くか分からなくなっていたペトロを踏み止まらせ、神様の許へと導き返す大切な役割をしたのが、数時間前に語られたイエス様の言葉、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」でした。この言葉が語られた時のことを思うと、とても考えさせられるのです。ペトロは、この言葉の本当の意味に気が付いていませんでした。何か自分たちを批判する言葉程度にしか思っていました。しかし、この言葉は、ペトロにとって、神様の許へと導き返す、限りなく尊い言葉となったのです。この言葉が、既に語られていたのです。ペトロに与えられていたのです。そのことの意味の大きさを思うのです。

イエス様は、どうしてそのような言葉を既にペトロたちに語っておられたのでしょうか。イエス様が「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」との言葉を語られた時の思いが、よく分かる箇所があります。同じようにイエス様の言葉を伝えている箇所の中で、ルカによる福音書に記されている言葉です。イエス様は、ペトロに向かって「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われる前に、こういう言葉を言われました。「シモン（これはペトロのことですが）、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。」と。ここでの「信仰」とは、人間の確信のようなものではなく、神様との関係です。本当に危機の中を歩いていく。自分の弱さを心底知らされていく。そうなることを、イエス様は知っておられるのです。知っておられて、その弟子たちと神様との関係がなくならないように祈っておられるのです。そうだからこそ、人間の弱さが噴出しているようなこの場所が、イエス様に祈りによって支えられているのです。それ故に、ペトロは自分を見失ってしまっていたところから、神様の御許へと戻ってくる事が出来たのです。

こうして受け止めてくると、ペトロがなぜ自分の弱い姿をなぜ率直に語ったのか、

分かるように思います。自分の弱さが噴出しているようなあの場所においても、神様の慈しみは貫かれていた、そのことをどうしても知ってほしいと思ったからです。同じように、私たちがどのような状況似に立つとしても、神様の私たち人間への慈しみは、決して変わることがないのです。ペトロは、イエス様が十字架に向かう道において、そのことを深く受け止めさせられたのです。

・主の慈しみの中で

私たちは、信仰の道を歩んでいきます。その意味で、私たちはイエス様の手を掴んで歩いていくのです。その歩みへと私たちは招かれています。しかし、そこで忘れてはならないのは、イエス様の手を掴もうとしている私たちの手は、既にイエス様によってしっかりと握られているのです。まず、イエス様が私たちの手をしっかりと握ってくださっている、その手は離されることはない。そこから全てが始まっているのです。イエス様の慈しみの手、憐れみの手によって支えられているのです。その手は、どんな状況の中にあっても、変わることがないのです。

新しい年度が始まり、教会聖句も新しくなりました。「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる。」、哀歌 3 章 22～23 節の言葉となりました。この年度も、先行きは必ずしも明るくはありませんが、どのような時であっても「主の慈しみは決して絶えない」のです。私たち人間の状況を超えて、そこに貫かれている神様の慈しみに支えられて歩むのです。その恵みの中を、新しい年度も歩み続けていきたいと願います。